「レビュー」特集

家政学をめぐる諸問題—対談

多田道太郎, 稲垣 博

▼稲垣 本日は家政学についての多田先生のご意見をうかがうということでこの対談を始めるのですが、その主旨は、桑原武夫先生が創立された“現代風俗研究会”の主宰を、現在、多田先生が受け継いでおられる、そこで、風俗研究の立場から家政学が今日かかえている諸問題について先生のご見解をうかがうことにありますので、よろしくお願いします。

さて家政学について最近『家政学の間違い』というタイトルの翻訳ものが現れ、いささか話題になっております。これを一読してみても分かったことは、19世紀後半以後科学と技術がめざましく発展したという風潮の中で、米国では20世紀に向けて、家庭生活や生活スタイルにまつわるいわゆる社会問題を科学的合理性によって処理しようとする運動が盛んになり、このトレンドは家政学会の創立の力とはなりましたが、他方、真の人間生活とは何かということを忘れさせた面も現れ、それが“間違い(行きすぎ)”という指摘になったのではないかと思います、いかがでしょう

▼多田 シャピロの『家政学の間違い』¹⁾というのはアメリカで出た本で、原本には『パーフェクション・サラダ』とある。日本で翻訳したときに『家政学の間違い』という題になった。それだけ日本人の問題意識として、家政学はどこか具合悪いのと違うか、というのがあって、こういう題で翻訳をつくられたんじゃないかと思うんです。

アメリカの家政学は、科学的に、あるいは合理的にやっつけようということが、特に料理においてきつかったんでしょうか。風味というものを考えないで、むしろ栄

養学的に、あるいは生理学的に何が一番いい食べ物か、ということをやっと追跡していったら、「パーフェクション・サラダ」になった。味という点から言うと、見放されてしまった。これはなかなかおもしろい指摘ではあると思うんです。簡単に言えば、風味というものと科学的分析というものを結合できなくなった、というところにホームエコノミクスの間違いがあるんですね。

ところが一方、衣服の方から言いますと、風合いというよく似た問題がある。それをどういうふうに考えていったらいいかという、具体的な問題提起だと思うんです。

家政学という学問には、理科系と文科系とがある、と言ってしまうのは漠然としてしまうかもしれません。福沢諭吉²⁾の言葉をかりますと、かたちに見えるものとかたちに見えないものがある、かたちに見えるものが、フィジックやケミストリーであり、かたちに見えないものが、いわゆる文系です。その二つが、家政学を考えたときにはなければ困るし、現実には家政学は文系と理系とが競合し、協力し合える、「総合大学」ではほとんど唯一の学部です。このことは最後のほうで申し上げたいと思います。

その前に、文系と理系のアプローチが非常に違うと思うのは、文系の場合ですと、風合いにしろ、風味にしろ、風土性やその地域の文化性と深く関わっていますので、一挙に普遍的な基準は立てにくいんです。

明治の初めに、坪井正五郎³⁾という先生がおられました。先生がはじめにやられたのは、明治20年に、風俗漸化——風俗が少しずつ変わっていく、その変化を計る簡

多田道太郎氏

稲垣 博氏

Some Problems Involved in Home Economics—A Colloquy

対談者紹介 MICHITARO TADA and HIROSHI INAGAKI

Mukogawa Women's University,

多田氏は武庫川女子大学 生活美学研究所所長, 京都大学名誉教授

稲垣氏は同大学家政学部 教授, 工学博士, 京都大学名誉教授

多田氏は、フランス文学、風俗学、コミュニケーション論が専門で、著書として「風俗学」(筑摩文庫)、「身辺の日本文化」(講談社)などがある。毎日出版文化賞、キネマ旬報賞を受賞され、諸芸百般を趣味とされる。

稲垣氏は、高分子物理化学、特に、分子特性解析、分離学及び溶液論が専門で、高分子学会功績賞(1986)、本学会功績賞(1987)を受賞されている。水泳、音楽鑑賞、猫(に関わること)を趣味とされる。元本学会長。

本対談では、既成観念にとらわれず「家政学」を考えなおして載いた。

単法。簡単に風俗の変わり方がわかるという社会調査を独創でやられたんです。何をやられたかと言うと、上野公園へ出かけて行って、髪と衣服と履物と、この三点に限って、下駄を履いているのが何人とか、日本髪を結っているのが何人、そういう数字をずっと上げてこれた。これが風俗学的社会調査の始まりであって、ここには土着日本的な発想があったと思うんです。

当時の日本で一番重要な注目すべき、変化の学問です。私は大変立派なお仕事だと思うんですけども、坪井先生がイギリスへ留学されて、むこうの正統の文化人類学の先生方と接触すると、こういう学問は非常に幼稚だったんです。むこうにはそういう伝統がなかったわけです。たとえば、病氣もそうなんですけれども、風土と関係の深い臨床医学は非常に早く発展していきます。日本だったら湿気が多いせいでしょうか、腎臓病の研究、これはかなり進んでいる。むこうのほうは、ヨーロッパという高燥の地ですから、腎臓病は比較的少ないし、研究もまた弱い。そういう風土の違いというものに坪井先生はまともにぶつかって、ヨーロッパの学問におそれいっていっぺんに降りてしまわれたんです。つまり、イギリス風の文化人類学のやり方を輸入されて、東大の教授として人類学の開祖になられた。

文系の学問は、土着の発想がなければいけないけれども、国家や社会の大きな要請によって、先進国のものを取り入れていくという例が実に多い。そこに、日本の国立大学を中心とする文化系学問の基本的な弱さがあったと思います。

そういうことから、身近のものについて、西洋の学問からは発想しにくいという例がある。たとえば、私たちは風合いや風味に非常にこだわっていますけれども、それにあたる外国語は一体なんだろう、と考えてもなかなか難しい。特に、文化論的な研究はさほど強くないと思うんです。

ところが、理系はそうではない。一挙に普遍性を求めるような原理原則的な問題があって、これら理系と文系二つをつき合わせるというのは、ようやく今我々の学問レベルでの問題意識になってきたという気はするんです。

▼稲垣 次に日本の伝統的女子教育に与えた欧米文明の影響という視点から、今日の家政学を考えてみたいと思います。江戸時代から明治初期にかけて、イエを守るための種々な技(わざ)、つまり家事と、精神訓が女子教育の中心であった。時の政府は米国へ送る岩倉使節団に五人の少女を随行させ(明治4年12月)、今日流に言えば国際化時代の幕開けへの準備をしたということがありますが、このような流れがその後どのように展開されたのでしょうか。

▼多田 明治5年のことでしたが、本願寺の島地黙雷⁴⁾という人がヨーロッパへ行って、雷にうたれたようだと、文明というものの光り輝きに驚いたという記録があるんです。都市の輝きや衣服のきらびやかさ、科学と文化が一緒になったところで、19世紀後半のヨーロッパのすごい状況を実感するわけです。これはもうアカンということで、日本のものはすべて捨てようという極端主義が生まれてくる。

芸術、ことに音楽の領域では、伊沢修二⁵⁾という人、この人で、江戸の邦楽の伝統を全部切られてしまったんです。スコットランド民謡、そういうものがどんどん入ってきて、我々の音感そのものを根底から変えるようなやり方をしてしまった。ところが視覚的な方は、浮世絵がすでにヨーロッパ社会で認められていました。日本画と西洋画は、フェノロサなどの努力もあって、明治時代には両立していたんですけれども。

ややこの音楽の事情に近いのが、日本における家政学ではなかっただろうか。それプラス、『女大学』⁶⁾的なモラルだけが接ぎ木されたところに問題があった。どちらかというと、技術的に強いのは西洋の裁断であって、和の魂は精神訓話的なもので、この両方がつなぎにくかったというところが、女子教育の中心としての家政学の反省点ではないか。

▼稲垣 ここで話題をかね、家政学のディシプリンとしての性格について考えたいと思います。各学問分野の研究は、一般論として、対象が決まっているもの(対象学)と、方法が決まっているもの(方法学)とに大別されると言われています⁷⁾。後者は理系で言えば、たとえば核磁気共鳴法という測定法を用いて天然に存在する化合物から人工的なものまですべての分子構造を決めるというすっきりした研究の進め方があり、前者は多様な対象に対して異なる方法論を用いて、行うという複雑な研究の仕方です。

このような分類によると家政学は対象学に属することになるが、同じく対象学に入る人類学、医学、農学などに比べると、その対象は、理科、文科が複雑に入れ混ざり、しかもきわめて広範にわたっていることに気がきます。これが家政学をめぐる一つの問題で、それ故に、家政学は成立以来100年近く経った現在も、学問としての自立性(アイデンティティー)を得ないままではいるのではないかと思うのです。文科からのご見解は？

▼多田 学問対象として文系で一番やりにくいのは、変化がすごく激しいということです。でも逆に、社会変化がすごいからその目立った法則をつかまえてやろうという野心も起こるわけです。それをおやりになったのが、民俗学の柳田国男先生⁸⁾だと思います。

柳田先生がなぜそういうふうになつたかと言え、明治の中期から農村社会が急激に変わっていったんです。こんなことしてたら農村の大事な糸車とか、そんなものはいったいどうなるんだろうという危機感、その危機感にうながされて柳田先生の学問は出てきた。

西洋では、技術がどんどん進んできた前機械はダメになってしまう、ダメになってしまったものの意味はなんだろう、ということで、産業のアルケオロジーというのは非常に盛んです。けれども、生活スタイルのアルケオロジー、これをやろうというのはごく少なかった。ま、ブルターニュの民話をやったセビヨぐらいでしょうか。そのへんに、柳田国男を生んだ日本社会のおもしろさがあったと思います。

そういうことで言いますと、変化のもとになる民俗史、記録をつくっていかないといけない。どういう方法があり得るかと言え、最終的には人間の暮らしというものに目をつける。つまり、文系は目にみえないものだけれども、目にみえるものを手掛かりにして、そこで発想していないかと学問になりにくいということです。今の学問の世界では、モノと、モノにあらわれている意味づけ、その痕跡、未来性、普遍性、妥当性、合理性、あるいは美的意味、こういうものを追跡していくよりしかたがない。だから、家政学は人間関係論は入れるべきではなかったと思います。育児学、あるいはジェントロジーというのは、家政学に係る学問ではありません。けれども、人間対人間の問題ではなくて、モノの痕跡の中から人間の何かの活動、こういうものを合理的に取り出そうと思ったら、やっぱり人対モノの格好で、日々の暮らしの中で人間がモノとどう格闘してきたか、そこから何を学んできたか、それをどう変えようと思ったか、というところをずっとたどる。

そのとき、衣食住という考え方の枠組みを守ることが果たして正しいことかどうか、これが問題なんです。中国の2000年ぐらい前の古典に、衣食住という分類がある。それをそのまま守っているわけです。そういうジャンル別に分けるという考え方が、実は家政学をかなりまづくしてるんじゃないかと思います。

▼稲垣 研究対象を人対モノに限定しようとの考え方に全く賛成です。イエにまつわる人間関係にかかわると、そこにはモノの介在もあり、これらの諸要素をまとめて学問的に取り扱うことは、物理学でいう多体問題を解けというに似たことになり、これは不可能に近いことを意味します。

終わりに述べられた衣食住のことですが、これらを並列的に論じようとする限り、家政学の前進はないという示唆は、すでに40年前、今 和次郎⁹⁾という先生が指摘

されていることを知りましたが、これについてご意見を。

▼多田 家庭や家というものを人間関係としてつかまえると、独身者や単独者の視点が落ちてしまう。そういうことで、今 和次郎先生は、たとえば昭和初期に新宿3丁目、後に言う赤線地帯で働いていた女性の暮らしの部屋ごと写真されたんです。押し入れや、そこに置いてある布団の畳み方、そういう人間の行動に関係することをスケッチして、暮らしの全体をつかまえるという実験をやっておられる。

今先生はもともと建築のご出身で、日本の建築をずっと見て発見されたのは、日本の家屋は三つの段階からなっている、と。一つは土間です。もうひとつは板の間、それから畳の間、この三つがある。仏壇が置いてあるとこはどこかと言いますと、土間にはほとんどない。畳というものは遠来の神様がいらっしやるところだ、だから仏間は奥の畳の間においてある、というのが先生の仮説です。価値観と、日常のふるまいと、住宅構造の相関をお考えになったんです。

土間にいらっしやる神様は火の神様です。見下げていくわけではなくて、普段の暮らしに最も親しい神様はそこにいらっしやるという考え方です。ですから、ここは土足のままでいい。ところが、板の間へ上がりますと、やや普遍的な神様がいらっしやって、そこではハダシになる。日本では、神に接するときにはだいたいハダシになるんです。つまり、靴(履物)を脱ぐという姿勢が、一番正しい姿勢なんです。

オーストラリアのネウストブニー¹⁰⁾という学者は、なぜ日本人は奥の間へ行かないと挨拶しないんですか、と言われるんです。奥の間へ行ったときが一番正式になる。このとき決して靴をはいて上がらない、これが大事なんです。ですから、ハダシにならないとお百度参りはできませんし、人間が海から身投げしようというときは、ハダシになって入る。それから、汽車に乗ったときに日本人は、すぐ靴を脱ぐという。あれは一番根源的なものなんです。靴をはいているのは仮の姿勢であって、落ち着いて価値的な行動をしようというときは、たとえば挨拶をするにしても、土足のままの挨拶は成り立たない。奥の間でハダシにならないと、ダメなんです。今でも玄関で靴を脱ぐという習慣が、99%少し越えるぐらい守られている。これは、人間が生きていくスタイルの説明として重要なことなんです。

ところが、衛生ということだけで考えますと、その方がほこりが少ないし、きれいだと言って、衛生思想解釈で終わるわけです。

▼稲垣 私個人の観察ですが、ここ10数年来、欧州で

も玄関で靴を脱ぐ家庭が増えています。奥さんが日本人だとか、滞日経験のあるなしとは余り関係のないようにみえるのですが、このような習慣が日本に見られる要因は？

▼多田 たぶん高床式の中からきた習慣だと思いますけれども、そういうものと、神観念という価値観とが結びついて、我々はいつでも下駄を脱ぐ、足をすすぐという習慣を守ってきたわけです。こういう保守性が、今は逆に現代性を生んでいる。私は、靴を脱ぐほうが現代的だと思います。そういうところまで、全体の関連においてみようという考え方が、今先生のすばらしいところだった。しかも先生は、大正12年の関東大震災の後に出てこられた学者なんです。あそこで大転換があった。なぜこういうふうに変わるんだらうという法則追求的な考え方で、衣服も、住も、食の問題も全体として、変ったのがいいのか悪いのかという価値観の問題も含めておやりになった。このへんに、私は家政学の革命の芽はあったと思います。

▼稲垣 ただいまのお話のように、家政学の古典として今先生の貴重な業績があったにもかかわらず、それが現在の家政学の中に生かされていないように見受けられる。これには大学に家政学部が設置された頃のいきさつ、つまり、文部省の認める教員資格の判定に合格するためには論文数や学位が問題となり、それが家政学を衣食住の各分野に分断する結果になったと思われます。しかし、それにもまして困ったことは、家政学が実践の学といわれ、女子を良妻賢母に仕立てるのが目的で、この枠内に疑問を持つことはタブー視されていたのではないかなと思えるのですが。

▼多田 決められたものは疑ってはいけない、と言われると困るんです。学問というものは、懐疑がなければ学問にはならない。ただし、実践も知っている必要があるわけです。たとえば、ヨーロッパ人はテーブルに座るときは直ん中がいいとか、日本人の場合は奥がいいとか、これはエチケットのルールとしてある。それは知ってたほうがいい。ただし、それがなんでなんだろうということを疑わないと、現在これだけ価値観が揺らいでいるわけですから、実践の学としての家政学は、とても生き延びていけないと思います。

▼稲垣 単純な疑問ですが、考古学や天文学にはアマチュア研究家が多数おられる。家政学にそれがないのはどういうことでしょうか。料理や服飾の評論家はおられますが。

▼多田 私がかねがね疑問に思っているのは、家政学部で職を得ないで夢中になってやっている、民間家政学者というのは果たしているだろうか、ということなんで

す。家政学が研究として自立しているんだったら、アマチュアがもっと出てきていい。アマチュアがそれこそカラオケ的にどんどん家政学をやってはじめて、研究のレベルの高さが起こる。そういう問題が家政学でどうなんだろうかと、という疑いと悩みがあることは事実です。

▼稲垣 ここでも再び家政学の学問としての自立性が問われることになりましたが、そこには家政学のよってきた home economics にも問題があるのではないかと感じられます。言語学的に economics には house の経営という意味がある。しかし、それは house であって、心がない。そこで home を先につけて二重表現とした結果、ことが、複雑怪奇になったのではないかと。

▼多田 もともとエコノミーという考えは、家を小さな実験台にして、その中の経済ということから起こってきた。日本ではこれを家政と言う。政治に近いマネジメントにしたわけです。ただし、エコノミーは学問になったけれども、家をマネイジするほうは儒教的なイデオロギーになった。ですから、イデオロギーの学問であって、客観性を持った学問にはなりにくい響きが、家政という言葉にはあるような気がします。

▼稲垣 日本の家政学がイデオロギー的であるというご指摘から思い出したのですが、家政学部のカリキュラムに必ず顔を出す、消費科学にもそのような傾向があると思うんですが。

▼多田 消費科学、これもかなりイデオロギー的にかたよったものではないかという、やや批判的な見方をしているんです。商品と接触する人間を消費者と決めて、モノを安く賢く消費するのが人間の原点である、と決めてしまうことにかたよりがあるわけです。特に、資源の有限性が今日の問題になってくれば、無限に生産し続けて、無限に賢く消費し続けることが、果たして人類の理想として成り立つかどうか。そういうことからすれば、生産者対消費者という考え方自体が、問題視されなければいけない時期にきていると思います。

▼稲垣 今年にはいって、大学設置基準の見直しが行われることになり、各大学は今後の自立態勢の強化に向け歩み出しています。それに伴って、学部、学科の名称変更が模索されている現状です。こんな中で家政学部というのは、家政学がすでに話し合ったごとく、客観性を持つ学問になりにくい響きがあることから、その名称を変える必要があるかもしれません。

そこで安易な名称として「生活科学」が出てきますが、これは文科を排除する響きがあり、一方「生活美学」というと、理科が落ちるようになります。このように考えると、ドイツでの家政学の表現の一つ、Haushaltungskunst に興味があります。Kunst はもとも

と技や手芸を意味しましたが、16世紀頃より芸術的なものの意に転化したようです。たとえば Kunsthaus (美術館) がそれです。こんなドイツの発想、つまり「暮らしのための芸術」といった名称が一案として浮かびます。ただし、これには適切な日本語があつてのことですが。

そう考えると、もし理系をうまく取り入れる根拠があるとすれば、「生活美学」は家政学にかわる表現かもしれません。最近には特に、ワビ、サビといった感性も自然科学的計測の対象にしようとする研究を、大阪市なんかが中心となって、産学官連合のもとで進めようとする動きもあるようですから¹¹⁾。そこで、美学の今日的意味についてお話し下さい。

▼多田 昔のアカデミックな美学という言葉は、今ほとんど日本では消えてしまっています。むしろ、価値観を入れたライフスタイルとして定着しつつあるようです。「それでは男の美学にならないよ」そういう言い方をしている。以前のイデオロギー的なものはかなり払拭されていますから、将来理系の学問を入れていくことも難しくないと思います。ただし問題は、家事の実際、生活の知恵、技です。

たとえば、カニの中に青い変なものがあるでしょ。あれを食べたらアカンと言うことは、昔の人はよく知っていた。ところが、私の友人の美学者はものすごい食通なんです、食べたんです。それで血圧が下がって、大騒ぎになりました。その程度なんです。我々のレベルは。これをどうしたらいいか。江戸時代は、節用集¹²⁾という恰好で、ちゃんとした実用書が出ている。それをどうしたら伝えられるかという問題は、学問よりも少し底辺にある問題なんです。これを同時に考えていかないと、空理空論に終わる。味がなにもわからない人が栄養学をやっているとか、風合いがなにもわからない人が被服学をやっているというこっけいさからどうしたらまぬがれるか。これが大きな問題です。こういうことが引っかけかかっているところは、旧家政学がおもしろい学問と言えるでしょう。

▼稲垣 前に家政学のアマチュアという話題が出ましたが、現実には料理や服飾の研究家がおられ、これは、大学教員としてでなくても職業として成り立っている場合も多々あるでしょう。これらの人々が横の関連性に目を向けて、家政学の底辺を支えてもらえることがあれば、と思うのですが。

▼多田 底辺というのは学問によっての底辺であって、人間としては決して底辺じゃない、という逆転現象もあり得る。たとえば、「京のおばんざい」をやっておられる、大村しげさん¹³⁾。すごい知恵と技術があるわけです。こういうものと連動した新しい学問を考える。

もうひとつ大事なことは、イエ・イデオロギーを脱色することです。脱色しながら、しかし、家というのはどんなに大事なもののか、共同生活というのはどんなに大事なもののか、というのを具体的なモノを通じて知ることです。イエ・イデオロギーではなく、イエ・ルネサンスです。

坂口安吾¹⁴⁾という文学者が、ほんとに家を失っていたわけです。そして、悲惨な生活をしたけれども、夜になるとやっぱり帰りたくなる。これはなんだろうということを言っているんです。この感覚が大事なものだと思います。

この頃は、自分風の落ち着き方ができるような、そういう場を設定したいという気分が起こってきていきます。これがインテリア志向なんです。これは椅子や机といった室内装置の問題ではない。

自分がいる場の感覚、これをアメリカの原住民は、センス・オブ・プレイス——場所の感覚と言っているそうです。これは人間にとって重大な感覚だということに気がついてきた。ですから、移動に対する抵抗が起こる。単身赴任や毎日動き回る「痛勤」についての抵抗、そういうものとしての「住まい」、でしょうか。これは心が澄むという意味だ、という説もあります。心が澄むような場の感覚をつくりたい、これがかつての家の持っていた一番いいものだと思います。

▼稲垣 家政学という名称はともかく、『人対モノ』の関係を考え、そこから新しいイエ・ルネサンスを築き上げることの重要性をご指摘いただいたのですが、さらに、『人対環境』ということも問題にしなければなりません。自然環境に加えて、ファッションも一つの環境だという先のお話がありますが、このへんの事情と衣服はどのようにかわるのでしょうか。

▼多田 私は、この学部に入れていただいたおかげで、いろいろ啓蒙されたんです。そのうちの一つは、衣服内気候という考え方です。シャツとからだの間にあるクライメットですね。それは温度だけではなくて、湿度の問題も含んでいます。こういうクライメットをやらないうで、従来の気候学だけで今日の天気はどうだと言ったり、湿度をぬきにして温度だけを考えたりするのは、素朴すぎたと思います。身体と第一環境(衣服)との間にある、何か重大なものを示唆しているわけです。これをもっと徹底的にやらないといけないという気がします。

それから、模様や色という被服の外面的な問題は、たとえば人間が刺青したり、魔除けしたりというふうには、魔術的なものを社会に対して押しつけるという面があった。しかしそうではなくて、こういう美を目指して我々は生きているんだという、その証拠みたいにして衣服の

外面性があるわけです。そういうものはむしろファッションという格好で、自分はこういうふうに生きるんだという美的立場を予言してる。こういう予言のアートとしての衣服は、かつてはなかった。むしろ、伝統を受け継ぐという保守的な立場が多かった。三宅一生¹⁵⁾や、やまもと寛斎¹⁶⁾というアーチストは、美的なものを外に訴えるべきだということを直感して出てきたんです。

▼稲垣 衣服工学という分野があります。これは衣服を繊維や織物という構成要素の物性から考えようとする立場からの学問である。ですから、このような物性の研究・教育と衣服の作り方の教育が従来の家政学部被服学科の主流だったのですが、繊維学会でも、感性と快適性を取り込んだ工学的アプローチが模索されようとしているのが現状です¹⁷⁾。快適性の問題は、文系理系の接点としておもしろいと思いますが、いかがでしょう。

▼多田 肌ざわりとか、風合い、こういう問題はもう少し常識的に言うと、「快適」になる。けれども、快適ということの意味が厳密に詰められておりません。温度はこのへんがいいとか、湿度はこのへんがいいということと、自分のわがままを通したいというエゴイズムと、これとがうまく結びついてないんです。そのつながを考えていくという、これもおもしろい学問分野になり得ると思います。

▼稲垣 家政学が衣・食・住という分業をやめ、「装う(着る)」、「食べる」、「住まう」ことの中で、「人対モノ」の関係を調べる方向に進めば、「装う」と「住まう」は人から環境への、そして、「食べる」は環境から人へのアプローチが可能になり、新しい家政学が生まれるのではないかという期待が持てそうです。各論的な問題についてまだまだおうかがいしたいことも多々ありますが、本日はこのへんで対談を終えさせていただきます。ありがとうございました。

(1991年9月9日 於武庫川女子大学生生活美学研究所)

附記 この対談に先立って、家政学原論の現状につき貴重な示唆をいただいた、金蘭短期大学 横川公子氏に厚く御礼申し上げます(稲垣)。風俗学の問題については(社)現代風俗研究会の研究に負うところが多い。とくに、坪井正五郎については甲南大学 井上忠司氏の研究、今 和次郎については日本生活学会会長 川添 登氏の研究に負っている。記して感謝します(多田)。

(注)

- 1) シャピロ・ローラ (1986-) 『家政学の間違い』 種田幸子訳、晶文社 (1990)。
- 2) 福沢諭吉 (1834~1901) 教育家。
- 3) 坪井正五郎 (1863~1913) 人類学者。
- 4) 島地黙雷 (1838~1911) 仏教学者。
- 5) 伊沢修二 (1851~1917) 教育家。
- 6) 『女大学』 (1716)。
- 7) 日本家政学会編、『家政学原論』, p.3, 21, 朝倉書店 (1990)。
- 8) 柳田国男 (1875~1962) 民俗学者。
- 9) 今 和次郎 (1888~1973) 建築家、今 和次郎集第6巻, p.291, ドメス出版 (昭和46年)。
- 10) ネウストプニー・イリー・バツラフ (1933-) 言語学者、オーストラリア。
- 11) 読売新聞1991年9月4日朝刊。
- 12) 節用集 (1597)。
- 13) 大村しげ (1918-) 随筆家。
- 14) 坂口安吾 (1906~1955) 評論家、小説家。
- 15) 三宅一生 (1938-) ファッションデザイナー。
- 16) やまもと寛斎 (1944-) 服飾デザイナー。
- 17) 繊維学会誌, 47, 第8号, p.485 (1991)。

(平成3年10月5日受理)

マテリアルライフ学会 第3回研究発表会

主 催: マテリアルライフ学会

日 時: 平成4年1月30日(木)~31(金)

場 所: 日本大学会館

東京都千代田区九段南4-8-24

TEL 03-3262-2271

募集人員: 100名

参加費: 会員10,000円, 大学・官公庁5,000円, 学生1,000円, 協賛学協会員12,000円, 非会員15,000円

申込締切: 平成4年1月23日(木)

申込先: 〒113 東京都文京区弥生2-4-16 (学会センタービル内)

マテリアルライフ学会事務局

FAX: 03-3817-5800